

人は四圍の狀況に依りて其思想好尙を變^かへるものである、日本人が美術心に富み、美術に長^たけて居るのに反し、韓人が之を缺きて美術に劣等なるは、全く其國々の風景に支配されたものであらう。乾燥無趣味の風景を見慣れたる韓人に、美の觀念が乏しいのは誠に道理あることで、今日韓國に美術と名づくべきものが絶無なるは、全く韓國の山水に美が無いからである。而して、韓國の山水に美が無い所以は、畢竟するに山に樹木が無いのに基くことは疑れぬ、山に樹が無い故に河に水が乏しく地に濕^{うるはひ}が無い。古代の韓國は美術に富んで居た、蓋し其頃の韓の山には樹木が茂つて居たのであらうと察せられる、數百年の惡政は人民を貧ならしめ、貧乏は人民を驅りて山を裸^{はだか}にせしめた、今日の韓人が美の觀念を有せず、高尚なる趣味を有せず、崇高なる理想なく、遠大なる希望を有せずして亡國の悲境に沈淪しつゝあるは、悉く遠因を樹木なき山に歸せざるを得ぬ、韓國及び其國民を根本より救ふの途は、全國の山を綠にするに在ることは疑いない。

韓國の風景は、一般にしかく乾燥無趣味なれど、唯一つ限りなき感慨を遊子の心に起さしむるものがある、それは韓國の諸都市を圍める廢紙の城壁で、其崩^{くづ}れかかりたる有様は凄慘悲哀の觀念を喚^よび起し、觀る人をして何とも言へぬ一種の美的感情に打たれしむるのである、況して晩秋の頃これにまつはれる蔦^{つた}が紅葉して、將に枯凋せんとする光景は、日本に於て何處にも見られぬ悲哀の美の極で、韓國數百年來の悲劇の粹は、まさしくこれに現出されて居る、韓國が詩人畫家に提供し得る材料は唯これあるのみ、然しこは他に求め難き好題目で、これあるが爲めに詩人畫家等は、筆を載せて一度韓國に來遊して可なりである。

蝶類の配色分解に就きて

長野菊次郎

興るかと思へば亡び立つかと思へば倒るゝ美術雜誌の多き中に、一回だも發行期日を誤らず、一號は一號と改善を加へて、茲に五周年に及びたる『みづゑ』の發達につきては、余は單に、之を大下君の人格の然

らしむる所と斷言するに躊躇せない。余は生物學の一小部を研究する一措大にして、美術に對しては何の知る所もないが、明治三十年以來の知遇を得たる大下君の熱情が、今日の結晶を生じたるにつきては、余は滿腔の誠意を捧げて之を祝賀せずには居られない、故に余は門外漢ながら、一寸心に浮んだことを書いて、祝賀に易へたいと思ふ。若し他山の石たるものもあらば、そは大下君を始め、他の友人の賜に過ぎないのである。

赤の補色が緑で、黄の補色が紫、青のが橙であるから、補色を傍に置けば、其色が引立つと聞いて見れば、萬綠叢中紅一點の句が、色彩學上の理論に叶つて居る事が點頭される。色彩學上に於ける補色の關係につきては、隨分早くよりいはれて居る様で、美を口にせる人の皆承知せらるゝ所である、即ち色の性質クワリチーにつきては、より多く研究せられて居る様である。併し、色の分量につきては餘り多くいはれて居らぬ様である。否、實は寡聞なる余一人の耳に入らぬので有ふ。分量といへば、人により或は意味を異にせる人もある様である。寧ろ面積といつた方が間違ひない、畢竟色を配合するに際し、其色の占むべき廣狹である。例へば一枚の紙を赤と青とに塗るに、一分を赤にして九分を青にすると、九分を赤にして一分を青にするのは、確に其感じが違ふ。少し極端の例かも知らぬが、雪の中に烏の居るのと、暗夜に星の輝くのと、は雲泥天地の差がある。故に、色の配列の如何によりて、種々の感を喚起すると同時に、色の面積の如何も、亦感を左右する事は、美を研究する人の常に心掛けねばならぬことと思ふ。

元來、美に對する人の趣味は、決して同一でない。野蠻人と文明人とは違つて居る、小供と大人とも同じくない、素人の喜ぶものも黒人は却て之を卑しむことがある。併し、一般に子供や素人は、ハデな方を好み、大人や黒人はジミな方を好む傾がある。純正美術は別として、此等の點は、直接に應用上に大なる關係を及ぼすのである。例へば、小供と大人と衣裳の縞柄、又は模様には、確に區別がある。美學などの研究せられない以前から、自ら此相違は出來て居る、其後美術思想の進むに従ひて、此等の差異は漸次其度を加ふる事と思はるゝ、

此中には、色彩の配置が主要の地位を占むるならんも、其面積の如何も大なる關係を有せるとは無論である。苟も色彩上面積の注意が必要とすれば、如何にして之を研究すべきかの問題が生ずる。從來の美術家は、前人の試みたる所を襲用するか、又は之を基として多少の修正變化を與ふるの外は、重に其人の經驗熟練の結果、即ち自得といふ事を期した様である。併し日進月歩秒變分移の今日に於ては、常に恰好の材料を、各種のものに仰きて、嶄新なる意匠の應用を計ると共に、獨り經驗熟練を頼む譯に行かぬ事になる。一方には必ず組織的研究の必要を生じて來る。余が今爰に題せる蝶類の配色分解法も、亦此一法である。外國にては盛に行はれて居る様子であるが、日本にて初めて之を應用したのは、工學士武田五一氏であつて、また近年の事である。

蝶の種類には澤山あるが、種類の異なるに従つて其色彩斑理を異にし、之に對する感じも異なることは、諸人の經驗に徴して明である。例へばヒヨドシテフ、アカタテハ、ツマベニテフなどは、著しき赤色が加はつて居て、ハデヤカナ方で、いはゞ小供好のする方である。ジヤノメテフ、ヒカゲテフなどは、薄暗き色を帶び、ジミな方で、いはゞ大人好きの方である。然れば小供の衣裳にはヒオドシヤツマベニテフなどの色彩を應用し、大人に對してはカゲテフやジヤノメテフの色彩を適用する必要が生ずるかも知れぬ。併し之を應用するにつきても、其色の分量即ち面積の割合が知れなくては、之を自由に取扱ふことが出來ない。故に之を分解して、之が割合を定むる必要が生ずる。畢竟蝶の美は重に翅の色にあるを以て、其翅の面積を假に百として、其中に各種の色が其幾分を占めて居るかを計算するのである。扱此分解をなすには、展翅したる蝶の左か右かの一側の前後翅を、叮嚀に着色寫生するか、又は實物其ものゝ上に、目盛硝子を載せて、其目の數を合計するのである。目盛硝子とは、硝子板上に微小なる線を細き碁盤目に劃したるものである。之を作るには、一枚の大なる紙に正しく黒線にて碁盤目を引き、寫眞鏡にて之を適當の硝子板上に縮寫するのである。但しかくして得たるものは、陰晝なるにより、再ひ之を硝子板に映象せしむれば、爰に陽晝を得るのである。即ち此板

を寫生圖の上に載せ其基盤目の下に當れる、赤や黒、白などの色彩が占めて居る、目の數を合計し、百分算にて全體に對する割合を知るのである。今一法は、寫生したる畫を切り抜きて、色の異なるに従ひて之を切り離して數片となし、赤は赤、黄は黄と寄せ集めて、之を精密なる天秤にて計るのである、かくて得たる量目の合計に對して、其各色の掛目を百分比例すれば其割合が知れるのである、此法によれば精密の計算は出来るが、一々寫生圖を毀損する不便あるを以て、寧ろ前法によるのが好都合である、此法により前に擧げたるツマベニテフの色を分解すれば、其雄の表面は、橙色が十五と、淡綠黄色が七十一と、褐色が一四の割合になつて居る。此蝶は一見艷麗の觀を與ふるものである故に、或る圖案に都合よく、上記の色を同上の割合に用ゐれば、略ツマベニテフに對すると同一のハデヤカサを感じる事になるのである、故に多數の蝶の色彩(其他蛾にても又は他の昆蟲にても)を分解して、一定の表を製し置けば、之が應用に非常の便益を與ふるものである。今武田工學士の分解せられたるものを同氏の許可を得て次に擧ぐ

ゴマダラテフ	表	暗褐	七四	蒼白	二一	青灰	五		
ギフテフ	表	暗褐	六一、五	黄	二三、五	黒	一一、八	紅	二
		橙	〇、五						紫
									〇、七
ギフテフ	裏	褐暗	四六	黄	三六	黒	七	黄灰	四
		暗橙	二						紅
									三
アゲハノテフ	表	黄褐	七一	黄	二〇	黒	六、七	青	二
									橙
									〇、三
アケハノテフ	裏	淡黄	四〇	黄褐	三三	黒	二四	橙	二
									青
									一
アヲスヂアゲハ	表	暗褐	八一、五	黄綠	一〇	海綠	七	銀白	一、五
アヲスヂアゲハ	裏	淡褐	〇、五	褐	七四	暗褐	六	黄綠	一〇、五
									海綠
									八
		赤	一						

シロオビアゲハ表	暗褐	七六	褐	一八	クリーム黄三	赤褐	二	ライトレッド一
シロオビアゲハ裏	黒	三七	暗褐	三九	灰	一五	赤	六
クジヤクテフ表	クリーム黄	二、二						肉色
クジヤクテフ裏	赤褐	三四	暗褐	二二	茶褐	一五	黒	一四
ダテハモドキ表	黄	四	紫	一、五	淡紫	〇、五		紫灰
ダテハモドキ裏	赤紫	一、五	白	〇、五	淡黄褐	六	黒	一八
ダテハモドキ裏	淡黄褐	七六	褐	ナールプルス黄	八		黒	一〇
ムラサキテフ表	褐	四	ライト、レッド	一、五			白	〇、五
ムラサキテフ裏	青黒	五二	紫	三一	黄	五、五	白	五
ムラサキテフ裏	黄緑	六五、五	褐	一九	淡レモン	七	白	五
カバコダラ表	赤	〇、五					黄	三
カバコダラ裏	橙	五〇	パント、シンナ	二一			青鼠	五
カバコダラ裏	エロ、オカー	六					黒褐	二六
カバコダラ裏	橙	一二、五	淡橙	三六、五			白	パント、シンナ八
クノハテフ表	淡褐	六、五	青鼠	八	褐	二六	橙	一四
クノハテフ裏							黒	二、三、二

右に擧げたるは唯其一斑に過ぎないが、此方法は獨り蝶蛾に限らず、他の動物又は植物にも適用すること
 が出来来るから、色に之を試みたならば多少の利益はあると思ふ。前に述べた如く、余は美術につきては何の
 知る所もないが蝶蛾に對しては多少の趣味を有せるより、聯想的に蝶類配色分解の方法を紹介したので
 ある。